TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　621語

Why the Tail of the Fox has a White Tip

キツネのしっぽの先はなぜ白い

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：Rex Sterling

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　ウシとヒツジの番をしてくれる子をさがすおばあさん。クマもオオカミも声がだめでしたが、やさしい声のキツネがやってきて……。

"I must have a boy to watch my sheep and my cows," thought an old woman, and so she went out to look for a boy. She looked first in the fields and then in the forest, but nowhere could she find a boy. As she was walking down the path to her home, she met a bear.

"Where are you going?" asked the bear.

"I am looking for a boy to watch my cows and my sheep," she answered.

"Will you have me?"

"Yes, if you know how to call my animals gently."

"Ugh, ugh," called the bear. He tried to call softly, but he had always growled before, and now he could do nothing but growl.

"No, no," said the old woman, "your voice is too loud. Every cow in the field would run, and every sheep would hide, if you should growl like that. I will not have you."

Then the old woman went on till she met a wolf.

"Where are you going, grandmother?" he asked.

"I am looking for a boy to watch my cows and my sheep," she answered.

"Will you have me?" asked the wolf.

"Yes," she said, "if you know how to call my animals gently."

"Ho-y, ho-y," called the wolf.

"Your voice is too high," said the old woman. "My cows and my sheep would tremble whenever they heard it. I will not have you."

Then the old woman went on till she met a fox.

"I am so glad to meet you," said the fox. "Where are you going this bright morning?"

"I am going home now," she said, "for I cannot find a boy to watch my cows and my sheep. The bear growls and the wolf calls in too high a voice. I do not know what I can do, for I am too old to watch cows and sheep."

"Oh, no," said the cunning fox, "you are not old, but any one as beautiful as you must not watch sheep in the fields. I shall be very glad to do the work for you if you will let me."

"I know that my sheep will like you," said she.

"And I know that I shall like them dearly," said the fox.

"Can you call them gently, Mr. Fox?" she asked.

"Del-dal-halow, del-dal-halow," called the fox, in so gentle a voice that it was like a whisper.

"That is good, Mr. Fox," said the old woman. "Come home with me, and I will take you to the fields where my animals go."

Each day one of the cows or one of the sheep was gone when the fox came home at night. "Mr. Fox, where is my cow?" the old woman would ask, or, "Mr. Fox, where is my sheep?" and the fox would answer with a sorrowful look, "The bear came out of the woods, and he has eaten it," or, "The wolf came running through the fields, and he has eaten it."

The old woman was sorry to lose her sheep and her cows, but she thought, "Mr. Fox must be even more sorry than I. I will go out to the field and carry him a drink of cream."



She went to the field, and there stood the fox with the body of a sheep, for it was he who had killed and eaten every one that was gone. When he saw the old woman coming, he started to run away.

"You cruel, cunning fox!" she cried.

She had nothing to throw at him but the cream, so she threw that. It struck the tip of his tail, and from that day to this, the tip of the fox's tail has been as white as cream.

「ヒツジとウシの番をしてくれる男の子がほしいねえ」とおばあさんは考えて、男の子をさがしに出かけました。おばあさんははじめに野原をさがし、それから森をさがしましたが、どこにも男の子は見つかりませんでした。家へ帰る道を歩いていると、おばあさんはクマに出会いました。

「どこへ行くんだい？」とクマはききました。

「ウシとヒツジの番をしてくれる男の子をさがしているんだよ」とおばあさんは答えました。

「おいらじゃだめかい？」

「いいよ、わたしの動物たちをやさしくよべるならね。」

「ウガー、ウガー」とクマはよびました。クマはやさしくよぼうとしたのですが、これまでずっとうなってばかりいたので、うなることしかできなかったのです。

「だめだめ」とおばあさんは言いました。「おまえさんの声は大きすぎるよ。そんなふうにうなったら、野原のウシはみんなにげだすし、ヒツジはみんなかくれてしまうよ。おまえさんはやとわないよ。」

それからおばあさんは歩いていって、オオカミに出会いました。

「おばあさん、どこへ行くんだい？」とオオカミはききました。

「ウシとヒツジの番をしてくれる男の子をさがしているんだよ」とおばあさんは答えました。

「おれじゃだめかい？」とオオカミはききました。

「いいよ」とおばあさんは言いました。「わたしの動物たちをやさしくよべるならね。」

「ホーイ、ホーイ」とオオカミはよびました。

「おまえさんの声はかん高すぎるよ」とおばあさんは言いました。「そんな声を聞いたら、うちのウシやヒツジはふるえあがってしまうよ。おまえさんはやとわないよ。」

それからおばあさんは歩いていって、キツネに出会いました。

「お会いできてとてもうれしいです」とキツネは言いました。「こんな晴れた朝に、どちらへお出かけですか？」

「もう家へ帰るところだよ」とおばあさんは言いました。「ウシとヒツジの番をしてくれる男の子が見つからないんでね。クマはうなるし、オオカミの声はかん高すぎるし。どうしたらいいのかねえ。わたしは年をとりすぎて、ウシやヒツジの番はできないんだよ。」

「いえいえ」とずるがしこいキツネは言いました。「あなたは年よりなんかじゃありません。でも、あなたのように美しい方が、野原でヒツジの番なんかしてはいけませんよ。よろしければ、わたしがよろこんでかわりにその仕事をいたしましょう。」

「うちのヒツジたちは、きっとおまえさんを気に入るよ」とおばあさんは言いました。

「わたしもきっと、ヒツジたちが大すきになりますよ」とキツネは言いました。

「キツネさん、やさしくよべるかい？」とおばあさんはききました。

「デル・ダル・ハロー、デル・ダル・ハロー」とキツネは、ささやくようなとてもやさしい声でよびました。

「それはいいね、キツネさん」とおばあさんは言いました。「いっしょにうちへおいで。うちの動物たちが行く野原へつれていってあげよう。」

毎日、夜になってキツネが帰ってくると、ウシかヒツジが1頭ずついなくなっていました。「キツネさん、うちのウシはどこだい？」とか「キツネさん、うちのヒツジはどこだい？」とおばあさんがきくと、キツネはかなしそうな顔をして、「クマが森から出てきて、食べてしまったんです」とか「オオカミが野原をかけてきて、食べてしまったんです」と答えるのでした。

おばあさんはヒツジやウシがいなくなってかなしかったのですが、「キツネさんはわたしよりもっとかなしいにちがいない。野原へ行って、クリームを飲ませてあげよう」と思いました。

おばあさんが野原へ行くと、そこには死んだヒツジの体をかかえたキツネが立っていました。いなくなった動物を一頭ずつころして食べていたのは、キツネだったのです。おばあさんがやってくるのを見ると、キツネはにげだしました。

「このひどい、ずるがしこいキツネめ！」とおばあさんはさけびました。

おばあさんはクリームのほかになげるものをもっていなかったので、クリームをなげつけました。クリームはキツネのしっぽの先に当たりました。そしてその日から今まで、キツネのしっぽの先はクリームのようにまっ白なのです。

たんご と クイズ キツネのしっぽの先はなぜ白い

sheep ヒツジ	**cows** ウシ	**bear** クマ
wolf オオカミ	**fox** キツネ	**cream** クリーム
tail しっぽ	**gently** やさしく	

Q1 クマが番人になれなかったのはどうして？

① 足がおそいから　② 声が大きすぎるから　③ ヒツジがきらいだから

Q2 ウシやヒツジをほんとうに食べていたのはだれ？

① キツネ　② クマ　③ オオカミ

Q3 キツネのしっぽの先が白くなったのは、何が当たったから？

① 雪　② 白い石　③ クリーム

こたえ

Q1 ② クマはうなることしかできず、声が大きすぎて、ウシやヒツジがにげてしまうからです。

Q2 ① キツネはクマやオオカミのせいにしていましたが、ほんとうは自分が食べていたのです。

Q3 ③ おばあさんがなげたクリームがしっぽの先に当たり、それからずっとクリームのように白いのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Rex Sterling（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。